

磁州窯に就いて

小山富士夫

一

磁州窯は河北省磁縣彭城鎮にある北支最大の窯で、宋以來今猶盛んに雜器を燒き、支那で最も有名な窯の一つである。磁州の陶器を俗に繪高麗と呼んでゐるが、繪高麗はひとり磁州ばかりでなく、河北・河南・山西・山東・陝西・滿洲とひろく北支各地に流布してゐる作風で、その影響は朝鮮にも及び、我國にも傳はり、秦の宋胡錄、安南の繪高麗も亦その流れをくんだものと見られてゐる。然しその代表的な産地であり、又偶目する機會の最も多いのは磁州の繪高麗で、磁州の繪高麗と景德鎮の染付は支那を南北に分けた二つの主導的な作風であらう。

支那には昔から南船北馬といふ言葉がある。南船北馬を支那交通上の特徴とすれば、南磁北陶は支那陶磁器の一大區分であつて、かつて故中尾萬三博士も説かれたやうに、支那の窯業は南と北では原土・窯様式・燃料・焰性を全く異し、又製品の様式性格に著しい相

違がある。即ち中南支の窯は主として石を碎いて器地にした磁器であるが、これに反し北支の窯は概ね土をねつて器地にした陶器である。又中南支の窯は概ね傾斜面を利用した半圓筒狀の登窯であるが、北支の窯はすべて平地に築かれた兜形の丸窯である。又中南支の窯はすべて薪を燃料にしてゐるため焰が長く、從つて還元焰燒成となり青味を帶びたものが多いが、北支の窯はすべて石炭を燃料にしてゐるため焰が短かく、殆んど大部分酸化焰燒成のため黄味を帶びてゐる。又南の磁器は漢民族の創意によつて發明されたもので、從つて幽玄深邃な東洋的な風格を持つてゐるが、北の陶器にはイン文化の影響の認められる點が多く、器形文様にも西方的な要素が多分に加味されてゐる。又南の磁器は濕潤なその風土のやうに、どこことなく深さと潤ひがあるが、北の陶器は廣漠たる北支の原野のやうに、實に明るく乾ききつた感じがある。そして南の磁器を代表するものを江西省の景德鎮窯とすれば、北の陶器を代表するものは河北省の磁州窯であつて、景德鎮と磁州は支那を南北に分ける二大製

陶中心地とも謂へやう。

景德鎮は支那最大の陶都として世界的に有名なだけ、古くからこれに關する支那人・歐米人・日本人の記述・報告が頗る多く、先年ブランクストンの實地踏査によつて、その古窯址の研究も一段と進んだ。然し磁州窯は近年その名の世界的に高いのにかゝわらず、これに關する記述報告が殆んどない。見るべきものとしては侯德封著「河北省磁縣粘土鑛地質鑛業及窯業」がある位のもので、從來支那人の間では俗にこれを河南瓷とよび、とるに足らない雜器として寧ろ蔑視してきた傾向がある。

磁州窯は北支最大の窯で、宋以來連綿としてその太い流れを今日に傳へてゐるが、磁州窯の何よりの特徴は終始雜器ばかり焼いてきた民窯であることである。もともと民需を充たすための雜器窯として興り、今尙民窯として盛んに雜器を焼き、この窯を支持發達させてきたのは北支民衆の日常生活である。支那人の陶磁史觀には支那人通有の事大思想があり、例へば宋官窯・定窯・汝窯・景德鎮廠窯のやうな、禁中の御器を燒進した窯は言葉を盡してこれを賞揚してゐるが、一般庶民の使用するもの、例へば磁州の繪高麗、龍泉の青磁、景德鎮の染付などは、支那陶磁史上更に重要な意義があつても、全くこれを省みない傾向がある。従つて磁州窯は從來支那の文人墨客からは一顧の價もない雜器として省みられず、支那の陶書も亦餘りこれを重視してゐない。

磁州窯に關する最古の記錄は、明初の格古要論・卷七・古磁器の

條にある次のやうな記事とされてゐる。

古磁器出河南彰德府磁州好者與定器相似但無淚痕亦有劃花綉花素者價高於定器新者不足論也

磁州窯と定窯はともに北支の窯で、いづれも石炭を燃料とし主として酸化焰燒成である點は類似してゐるが、定窯は周知のやうに北宋隨一の名磁とされ、禁中の御器を燒進した窯である。その作風は精妙古今に絶し、又定窯は北支には珍らしい磁器である。これに對し磁州窯は北支にありふれた陶器で、器形・文様・作風も著しく相違し、特に目立つちがひは磁州のものは概ね器地を白化粧してあるが、定窯には概して白化粧がない。好者與定器相似などとは皮相な觀察で、稀に類似したものがあつても、一般論としては承服しかねる説である。又但無淚痕とあるが、淚痕即ち釉藥の流れは磁州にもあるものもあればないものもあり、定窯にもあるものもあればないものもあり、なにも磁州窯と定窯を區別する特徴とは謂へない。素者價高於定器も亦おかしい話で、周知のやうに定窯の方が市價も聲價も磁州よりは高く、殊に磁州の無地ものが定窯よりも高いとはこれをどう解釋すべきであらうか。たゞ新者不足論はその通りで、格古要論の著はされた明初頃のもの、宋代殊に北宋末頃のものに遠く及ばず、その作風が著しく降つてゐることは誰もが承認するところである。然し兎も角格古要論のこの記述は、頗る皮相雜薄な記事で、磁州窯の説明としては眞に不備なものだが、陶説を始めこれ以降の支那の陶書はいづれも單にこれを引用してゐるのに過ぎない。例へ

ば陶説はこれをそのまゝ引用して

磁州窯有河南彰德磁州格古要論曰好者與定器相似但無淚痕亦有劃花繡花素者價高於定器新者不足論也

と述べ、景德鎮陶錄も亦これに僅かの説明を附して

始磁州昔屬河南彰德府今屬北直隸廣平府稱磁器者蓋此又本磁石製泥爲坯陶成所以名也器之佳者與定相似但無淚痕亦劃花繡花其素者價高於定在宋代固著今人訛以陶窯瓷器既呼爲磁器不知另有是種窯

とあり、飲流齋説盜にも

磁窑出磁州（昔屬河南今屬直隸）宋時所建磁石引針之磁石即產是州取石鍊陶磁之名乃專指此令人輒誤以磁與瓷混用矣器有白釉有黑釉有白釉黑花不等大率仿定居多但無淚痕亦劃花凸花者白釉者儼同牛乳色黑釉中多有鐵繡花黑花之色與貼殘之膏藥無異

と稍々これを敷衍した記事がある。これ以外磁州窯に就いてはこれといった古い記録がなく、概して支那の愛陶家は磁州窯にはさして深い關心をもつてゐなかつたやうである。又例へば磁州志（康熙版）卷之十風土磁器の條には

磁器出彭城鎮置窯燒造甕缶盆碗罐瓶諸種有黃綠翠白黑各色然質厚而脆只可供肆店莊農之用不惟不敢比饒之景德常之宜興既閩之建窯浙之龍泉粵東之土瓷猶勝此萬萬矣

とあり、もともと土産を宣揚すべき磁州志でさへ、肆店莊農で使ふとるにたらない雜器で、江西省の景德鎮窯、江蘇省の宜興窯と比較にならないばかりでなく、福建省の建窯、浙江省の龍泉窯、粵東即ち江蘇浙江方面の雜器にさへ劣るといつて寧ろこれを蔑視してゐる。

然し磁州窯は前述のやうに北支最大の窯であり、最も北支的な特徴と性格をそなへ、北支諸窯の基幹ともいふべき重要な窯であつて、その究明は支那陶磁上最も意義深い課題の一つであらう。

西歐の盜學者はこれに留意しなかつたわけではない。例へばホブソンは

支那陶磁の研究で、興味最も津々たるものは古い磁州窯である。而かもその研究の今尙遲々たる原因は、始め日本人がこれを繪高麗と呼んで紹介し、研究家たちがこれを朝鮮のものだと誤解し、この謬見に提はれてその研究を等閑に附したのに歸因する

といつて、何かその罪が我々にあるかのやうなことをいつてゐるが、從來西歐盜學者の記述は、多くは支那人を頗使して支那の古い文獻を引用し、又は支那人の言説にたよつた常識的な解説を試みてゐるのに過ぎない。従つて何等據るべき記述のない磁州窯については何も書きやうがなく、そのため磁州窯に關する歐人の發表も全くなかつたわけである。それを我々が繪高麗と呼んだためなどとは牽強も甚だしく、寔に得手勝手極まる意見である。

私は昭和十六年五月北支各地の窯跡現窯を歴訪したついでに、共匪跳梁の危険を冒して我軍進出直後の彭城鎮を訪れた。幸ひ多年疑問にしてゐた磁州古窯址も發見出來たので、こゝに簡単に發見の顛末を記し、知見の一端を述べてみたいと思ふ。

二

今日の磁州窯は河北省の南端、河南省境に近い京漢沿線磁縣の西

方約七里の彭城鎮にある。彭城鎮は廣漠たる河北の平野がつき、大行山脈の一支脈たる鼓山のかげに僅かの平地がひらけてゐるが、その中央、滏陽河に臨んだ地點に位してゐる。三方赤禿の低い丘にめぐられ、東約五丁、北鼓山の南麓には大同・龍門・天龍山に次いで有名な響堂山の石窟があり、東北約一里には北支屈指の峯々炭鑛がある。

昭和十六年五月九日、私は日本軍の進駐したばかりの彭城鎮を訪れ、ほんの四五時間ではあつたが、かねがね一度見たいと思つてゐた磁州窯をざつと一通り見學することが出来た。

五月八日磁縣を發し、軍管バスで峯々に向つたが、この間七里、宏漠たる北支の曠野がはてもなくひろがつてゐる。これを横切つて廣い軍用道路が眞一文字に進んでゐるが、やがて行く先に大行山脈のはづれの赤禿の低い丘陵が見えだした。漸く道はいく曲り曲りはぢめたが、途中に前日共匪が爆破したばかりの橋がある。バスは落込むやうに河床に降り、これを迂廻して又もとの道に上つたが、いよいよ前線に來たやうな緊迫さを感じた。午後五時峯々着、その夜は部隊長のはからひで峯々部隊の將校室に泊めてもらひ、翌朝九時彭城鎮に行く軍のトラックに便乗を乞ひ、疾走二十分ほどで何の危険もなく彭城鎮に着いた。

彭城鎮は私の行くすぐ前まで八路軍が占領してをり、これを追ひ拂つて我軍が進駐したが、街には猶便衣の八路軍が盛んに出没してゐたので、單獨での行動は到底出来なかつた。どこへ行くにも護衛

兵數名についてもらひ、ざつと一通り、土漚・轆轤・釉掛・窯詰・窯焚等の仕事を見て廻り、又特にたのんでもう絶滅に瀕してたる繪附の鮮さも見せてもらつた。最後に鎮公署に邑の古老や顔役達を集めてもらひ、部隊通譯を介していろいろと質問をしたが、その時も屋根には歩哨が二三人上つてあたりを警戒するといった有様で、到底落着いて充分な調べをする暇はなかつた。出来れば少くとももう二三日滞在して、もつとゆつくりと細かい調べをしたかつたが、街には危ぶなくて到底泊れないし、營内も狭くてさうさう無理もない。午後三時、もう一度峯々から軍のトラックが迎へに來るまで、ほんの僅かの時間走るやうにして見て廻つた。

彭城鎮は人口恐らくは一萬ほど、南北約十五六丁、東西約四五丁ほどの細長い街で、その中央を狭い道路が縦に一本貫いてゐる。兩側には呉服日用雜貨を賣る店やうすきたない一膳飯屋や焼物問屋等がごちやごちやと並び、又狭い道を土を運ぶ車、石炭を積んだ牛車、陶磁器を運ぶ一輪車等の往來がなかなか頻繁で、いろいろの掛聲雜音で頗る喧噪を極めてゐる。街の裏はどこもひとつそりとした窯場で、兜形の窯がそこゝに林立し（挿圖第一）一寸と類を見ない頗る異風なながめである。空地といふ空地には石炭ガラ、毀れた匣鉢、焼損なひの破片等を堆たかく積み、それが何百年積み積つて高い丘が出来てゐる。窯場はどこも明るくゆつたりとしてゐるが、仕事場も住ひも塙もすべて使ひ古した匣鉢で出来てゐるのは、さすがに北支隨一の陶郷磁州でなくては見られない風景である。挿圖第二は

廣い中庭一面に碗をならべ、それを片端から釉^{グスリ}がけしてゐるところだが、仕事の早いことゝいつたら、小鳥が餌をつまむやうである。そして白化粧も釉^{グスリ}がけもすべてナマ掛けだから仕事のはかどることは驚くほどである。後に見えるのは匣鉢^{サヤ}で築いた仕事場と住ひだが、仕事場は細長い蒲鉾形をしてをり、光線は僅かに狭い入口からさすだけで、奥の方は眞暗である。中に入るとひんやりとし、ガラシとした洞窟にでも入つたやうである。その略々中央のうす暗いところに石の重い轆轤が二三打据えてあるが、大さは徑約二尺、厚さ四五寸、内地の轆轤よりは稍々大きい。一體どの位重いのか舉げてみやうとしたが、重くて到底上らない。聞いてみると軽いもので五六十斤、重いのは七十斤以上もあるさうである。それがキチンと鋼鐵の心に座り、廻してみると實に滑らかに少しのフレもなくよく廻る。日本では馴れた轆轤師でも鉢一箇水引きするのに二三回は轆轤を廻すが、驚いたことには四尺ほどの長い棒で搯鉢をこねるやうにして一回廻はすと、續けざまに鉢を五つ六つ引いてしまふ。削り、繪附、釉掛、窯詰すべてこの調子で、又實によく分業がとつてをり、能率の上ることは瀬戸や美濃の二倍三倍どころではあるまい。而かも悠容として迫らず、どこかゆつたりとしたところがあり、如何にものびのびとした仕事振りである。繪高麗の碗や皿が、颯爽として空馬天を征くやうで、奔放無凝少しの蟠りのないのはこの驚くべき仕事振りの自らの反映であらう。亂暴極るやうで整然たる規矩があり、何百年間鍛へに鍛へぬいた傳統と熟練とがある。

原土は附近の馬家庄、張家樓、蘭家庄、下河溝、河庄、石廟、孫庄等から仰いでゐるが、いづれも僅々一里以内のところ、我國の瀬戸信樂同様、無盡藏といつていゝほど豊富である。陶土の種類も亦頗る豊富で、これを青土、白土、缸土、籠土、砂子、砂器土、黃土、耐火粘土等に分け、それぞれ用途を別にしてゐるが、普通の器地には青土七、白土三を揀り合はせて使つてゐる。

釉料は南約十里の河南省安陽縣水冶集に近い南屏山北屏山の長石を用ひてゐる。これを鎮東の黑龍峒の豊富な水力を利用して粉末とし、白釉はこれをそのまゝ使ひ、黑釉、飴釉には鎮内そこゝから出る黃土を調合してゐる。

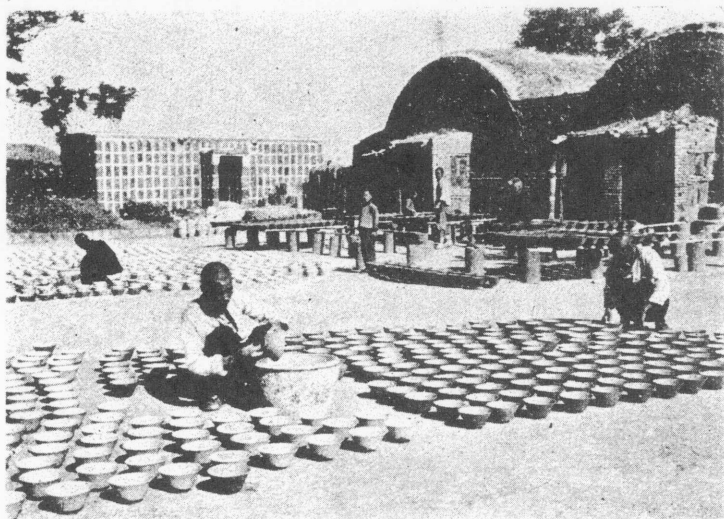
白化粧のことを白域といひ、その原土の採掘に一番苦心してゐるやうだが、丁度我國の白繪のやうに、厚い缸土の層の下に二三尺の薄い層をしてゐる。現在採掘してゐる地點は東北約二十丁ほどの羊臺と、西南約三十丁ほどの張家樓である。

製作工程は、1 轆轤で成形、2 これを陰乾^{カゲ}とし、3 適當の時高臺を削り、4 廣場に出してよく乾燥させ、5 これに白化粧を施し、6 その上に繪附をし、7 全面に釉藥をかけ、8 見込を蛇目に剥ぎ、9 窯に詰め、10 焼成することは廣く支那朝鮮で行はれてゐるのと同じ過程である。たゞ工程は整然と分業化されてをり、それぞれ専門の輪盤工^{ロシ}・模型工^{カネオコシ}・畫工^{エカキ}・装窯工^{カマダマ}・火夫^{カマタキ}・清窯工^{カマサウジ}・出窯工^{カマダシ}・綱工^{ニズクリ}・雜工^{ウラシ}がをり、内地朝鮮の窯のやうにひとりで何から何までするやうなことはない。

第一圖 彭城鎮全景



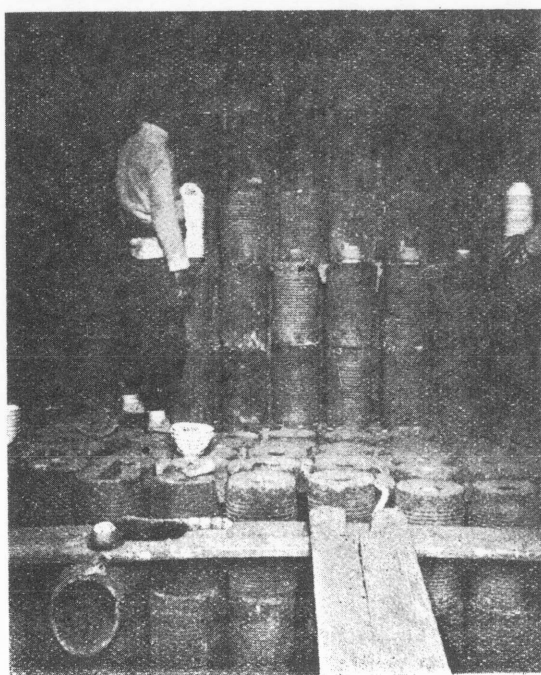
第二圖 磁州窯工房中庭の釉掛け状況



第三圖 兜形の窯



第四圖 窯詰の状況



窯は北支通有の兜形の石炭窯で、大中小四種類はあるが、様式はどれも稍々同じである。天井の高さは小さい窯で十五六尺、大きい窯は三十尺以上もあり、内容積は内地の普通の石炭窯よりはずつと大きく、大きい窯は鉢六七萬箇、小さい窯でも一萬箇以上はつめる。匣組は我國とは反對で、器物を伏せて二十ほど重ね、その上から筒形の匣をすつぱりと被せるが、匣鉢は内地のものよりずつと大きく、普通徑九寸、深さ一尺七八寸はある。

窯数は彭城鎮に大窯十座、次窯五十座、三窯五十座、小窯二十座、計百三十座あり、東北約三里の義井、上拔劍、下拔劍に四十座、西約五里の艾口に二三十座、總計二百近い窯があるが、事變以來この地方一帯が絶えず交戦地區として亂されたため、現在焼いてゐるのは六七十ほどである。

燃料は主として西方四里ほどの臺寨で、俗に狸掘りと呼んでゐる露天掘りの石炭を用ひてゐる。又峯々、西佐等、附近一帯には無盡藏に石炭があり、一窯少くも三萬斤は焚き、焼成には普通三晝夜かかる。事變前は一窯年平均十三四回は焚いてゐたさうだが、一時閉鎖状態に墮し、このごろ又やつと復活しだした状態である。

製品の種類は鉢・碗・皿・小甕・水甕・壺のやうな日用雜器がその大部分を占め、極く少數粗末な置物玩具の類も焼き、事變前は年産額百萬元位はあつたさうである。磁州といへばすぐに奔放な鐵繪文様を描きなぐつた繪高麗を連想するが、最近は事變前でも殆んど白無地・黒無地・飴無地・白黒の掛分けといったものが多く、磁州

獨特のあの親しみのある繪高麗は絶滅に瀕してゐたさうである。そして事變を契機にもう全く繪高麗風の陶器は焼かないやうになり、今日わづかに残つてゐる繪付は鉢碗皿の類に洋風のコバルトやどぎついクロムで粗惡な文様をかきなぐつたものである。かうして純樸な作風の消え失せて行くのはさびしいことだが、どんなに我々がなげき悲しんでも時の動きをどうすることも出来ない。然し磁州は今日でも北支で最も傳統的な古い作風を保持してゐる窯で、唐山や博山のやうに、安つばい歐風の食器類は造つてゐない。墮落衰退したとはいつても、どこかに宋以來の格調を傳へ、北支で最も古い傳統を保持してゐる窯である。

今日の磁州窯については猶こままと述べたいこともあるが、この小篇の目的でもないので、更に詳しい報告は他日改めて發表の機會があれば幸ひである。

三

今日の磁州窯は磁縣の西約七里の彭城鎮にあるが、磁州で最もいゝものゝ焼けた宋代の窯がどこにあつたか。これは久しく我々をなやました問題である。景德鎮・龍泉は古記録によつて略々その古窯址の位置も推定出来るが、磁州古窯に就いては何等の記録がなく、果してどこにあつたかは一切詳らかでなかつた。私は十年餘り前、支那各地の古窯址をその地名から推定發見しやうと丹念に地方志、地圖の調べをしたことがある。その時磁縣北方、邯鄲の西約四里の

紅山の東麓一帯に、東陶庄・西陶庄・工程村・南窯擋・郭家密・陳家密・東楊密・西楊密・黃家密・南高密・米家密・周家密・姜家密・李三密・劉家密・王家密・焦家密・北廓密・翼家密・北高密・趙家密・后家密等といふ或ひは製陶に關係があるのではないかと思はれる地名を發見した。支那の地名で密の字のつくのは必ずしも陶磁器を焼く所ばかりではなく、瓦甎・土鍋・焜爐の類の他、特に北支に多い石灰を焼く窯のあるところや、炭坑、鑛山のあるところも亦何々密と呼んでゐる。山西省には特に密の字のつく地名が多いが、これは多く炭坑のあるところのやうである。然し例へば有名な汝窯のあつた河南省臨汝縣の附近には、火燒村・楊密・劉密・徐密・盆密・郭密・于密・透風密・王化密・王密・郎密・何密・馬密・紅密等の地名がある。先年大谷光瑞伯の命をうけて故原田玄訥師が實地踏査された結果、これらの地名のところに古窯址のあることが確かめられた。又米内山庸夫氏は浙江省德清縣に後窯といふ地名を發見され、この地を踏査されたところ漢六朝頃に遡ると思はれる支那陶磁史上貴重な一青磁窯址の發見に成功された例もある。

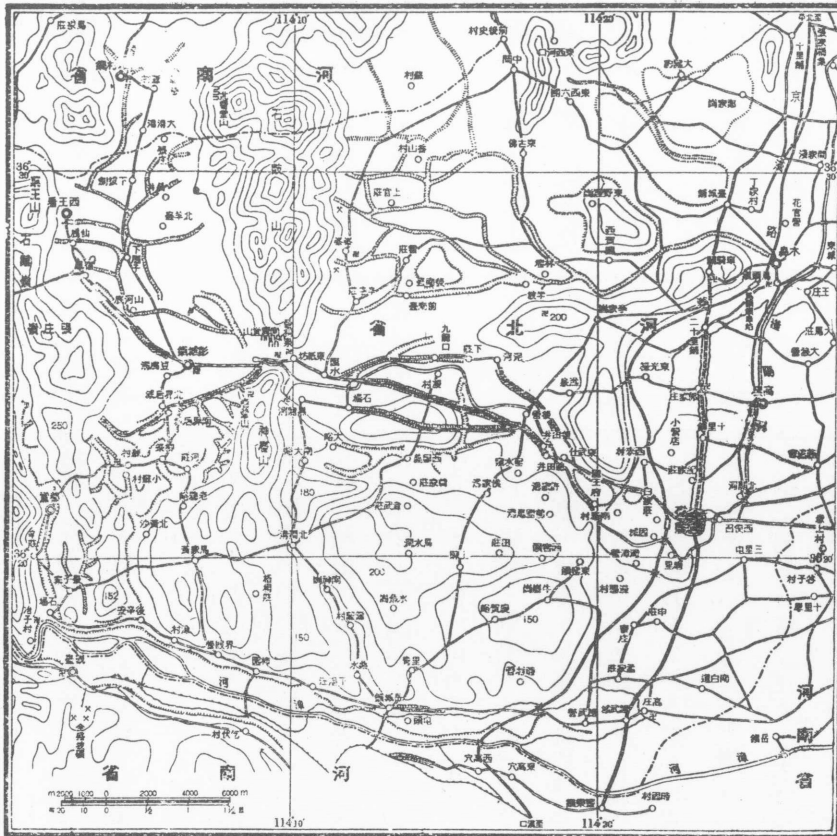
邯鄲西方の一群の何々密の地名が、このうち何に該當するかは不明であつたが、彭城鎮のすぐ北に位する點から、或ひは磁州古窯に當るのではないかといふ意見を先年「陶磁」第五卷三號に「磁州古窯について」と題して發表したことがある。私はこれを發表した責任上、かねがね一度實査したいと願つてゐたが、昭和十六年春、北支各地の調査旅行のついでに幸ひ實地踏査の機會を得た。

五月八日鉅鹿の調査を終へ、翌七日邯鄲着、午後三時軍のトラックに便乗を許されて長驅河南省武安に赴き、翌八日降りしきる雨の中を大河堡までひきかへし、大河堡分遣隊から特に通譯・兵三名・苦力一人をつけてもらひ、先づ北方一里餘りの西陶庄を調べ、ついで紅山東麓一帯の地區を踏査するつもりであつた。西陶庄に着き、村長や村の古老たちにいろいろ附近の様子をたづねたが、誰も附近に古窯址らしいものゝあるのを知つてゐる者はなく、東陶庄・西陶庄は昔陶姓の人がゐたところから起つた名であり、附近の郭家密・陳家密・東楊密・西楊密・黃家密・南高密・米家密・周家密等々は何れも原始的な小規模な炭坑のあるところだと聞いて、私の豫想の全くはづれてゐたのがつかりした。たゞ西陶庄の北約二里の冀密村には甕壺等の雜器を焼いてゐる窯が今でもあるさうで、ついでに踏査してみたいとも思つたが、雨は猶降りしきり、體はぐつしより濡れてしまつた。この上雨の中を往復四里も歩くのは兵隊さんにも氣の毒であり、かつはこの附近にピストルの射撃のうまい土匪がしきりに横行すると聞いたので、残念ながら調査を打切りとし、又雨の中を大河堡にひきかへした。

二日がかりの調査は徒勞に歸し、邯鄲西方にある何々密の地名はすべて炭坑地であることが解かり、磁州古窯に就いては改めて彭城鎮の古老たちにでもたづねるより仕方なくなつた。私が彭城鎮を踏査したのは現窯の一通りの見學もだが、その古窯址がどこにあるか、これをつきとめたいのが主眼だつた。彭城鎮に着くと、先づ鎮公署

の主だった人たちを呼んでもらひ、附近一帯を見晴らせる一番高いガラ山の頂に立つて、昔窯があつたといふ謂ひ傳へのあるところはないか、古い破片の落ちてゐるところはないか、一望の窯のうちの窯が一番古いか等、いろいろあれこれと質問してみたが、一向に要領を得ない。その内の一人に鎮の西南端のあの窯が一番古く、千

第五圖 磁州窯附近略圖（「郷堂山石窟」に據る）



年以上も續いてゐると教へてくれたものがあつた。早速その窯へ行つてみたが、落ちてゐる破片はついでこのごろのものばかりで、一向當になりさうもない。又鎮公署へ古老たちを集つてもらつた時にも、先づ古い窯がどこにあつたかたづねてみた。誰も返事をする者はなかつたが、歸りがけに古老の一人が、張家樓と東紙坊に昔焼物を焼いた跡があると教へてくれた者があつた。約束のトラックが迎へに來るまでにあと一時間しかない。張家樓へは三十丁餘りあり、残念ながら調査の時間がないとあきらめてゐたら、隊長から「君馬に乗れるか」とたづねられた。昔北海道で一二度乗つた位のこと、馬には乗れるといふほどでもないが、乗つてみませうかと答へたところ、隊長自ら案内してやらうとのことである。早速隊長と通譯と私の三人で、濛々たる黄塵をけたて、馬を走らせたが、それでも落馬もせず、ほんの四五十分で無事調査することが出來た。古窯址は張家樓の手前三四百米程の路傍にすぐ發見できた。然し散亂してゐる破片はやはり新しく、せいぜい清朝末頃としか考へられないもので、宋磁の破片らしいものは遂に一片も發見出來なかつた。古窯址の發見はもう斷念してゐたが、トラックが紙坊で水を汲む間にほんの十分でも二十分でも東紙坊の窯跡もついでにみて見たい希望を述べたところ、隊長は歸順の支那兵數名をつけてやらうとのこと、で、重ね／＼の厚意を謝して別れた。

紙坊の部落の略々中央響堂山の麓に、滾々と北支に珍らしい清らかな水の溢れ出てゐる處がある。澄み切つた清水が豊富に湧き、急

湍となつて矢のやうに流れてゐるが、この豊富な水源こそ無盡藏な土と石炭と共に、磁州製陶を榮へさせた原動力であらう。峯々の部隊からは毎日こゝまでトラックで清水を汲みにきてをり、往復ともこのトラックに便乗させてもらつたわけだが、兵隊が水を汲む三十分程の間に走るやうにして響堂山と紙坊の古窯址を見て廻つた。

響堂山は南北の兩響堂寺に分れてゐるが、南響堂寺は彭城鎮の東約十丁ほどの鼓山の南中腹に峻えてゐる。こゝに登ると彭城鎮が一望のうちにあり、斜陽をうけた陶郷のながめが實に美しかった。寺の後にいくつかの洞窟があり、それぞれに石佛が刻んであるが、大部分は時代が降るらしい上に荒廢が甚だしく、雲崗を見た時のやうな恍惚たる雰圍氣はなかつた。たゞ響堂山の名のやうに、窟内で小さな聲を出すと、それが四壁に反響してびんびんと鳴りひびくのが子供のやうに面白かつた。

紙坊の部落を東にはづれると、ひろびろとした河北の平野がはてもなくひろがつてゐるが、紙坊と臨水の略々中間、紙坊から三四丁東に寄つた畑の中に果して陶片の散亂してゐるところを發見した。拾つてみると俗に鉅鹿手と呼んでゐる白無地の宋の磁州の窯片である。續いて俗に搔落と呼んでゐる白化粧を搔落して文様を表はした手や、鐵繪文様のある古い破片も發見し、確かにこゝが多年さがしあぐんでゐた宋代磁州の窯跡に間違ひないことを知つて躍らんばかりによろこんだ。護衛の支那兵に手眞似で命じて、附近に散亂してゐる陶片を拾はせたが、瞬ち二三百片程集まり、その中には鉢の

二三枚焼き着いた破片もあり、窯址の破片であることは疑の餘地がない。ふと畑の中にある古井戸をのぞくと、その中程に匣鉢のガラガラ包含されてゐる層があり、宋の窯址が略々地表下二三尺ほどのところに埋没してゐるといふ推測がついた。陶片がどの位ひの地域に散布してゐるのか、ざつとした限界を知りたいと思つて走るやうにしてさがしてみた。陶片はかなりひろい範圍に散布してゐるといふだけで、大體の見透しもつかないうちに、トラックがしきりに約束の警笛をならすので殘念ながら調査を打切るの他なかつた。せめてもう二三時間あつたら、少しは試掘も出來たのにと殘念でならぬいが、然し斷念してゐた宋代の古窯址が、思ひがけず發見出來たのは、短時間の調査としては先づ先づ成功であらう。

猶トラックが走りだし北へ一丁ほどきたところで、ふと路傍の掘割りにガラガラと匣鉢の埋まつてゐるのを目撃した。瞬間通り過ぎたのでよくわからなかつたが、やはり地表下二三尺、長さは二三十尺あつたらう。宋代の古窯址は表土に被はれて舊態をとゞめず、現在は一帯の畑地となつてゐる。試掘でもしなくては果してどれだけの地域に互つてゐたのか遽かにはきめられないが、概ね紙坊と臨水の間、相當廣範圍に埋没してゐるやうである。即ち宋代の磁州の古窯址は彭城鎮にある現在の窯の東約一里ほどの地點にあり、もと窯は鼓山の丘陵の東側、河北の平野の西はづれにあつたのが、其後何かの事情で西方約一里の鼓山の西かげの狭い平地内に移つたものと推定される。宋代の古窯址には今猶無盡藏の古陶片が埋没してゐ

るものと想像され、他日この古窯址の組織的な發掘調査が行はれたら、支那古陶磁器の研究に資するところ少なからざるものがあると思ふ。

四

磁州の製陶がいつ起つたか。これに就いてはまだ充分な研究調査が遂げられてゐないが、^{註一}葉麟趾は

晋代已有出產、唐時曾有優良之品、至宋始著名

と述べ、晋時代から既にこの地方に製陶が行はれ、唐代には優れた焼物を産したと説いてゐる。^{註二}上田恭輔氏も亦その起源は晋代に遡るとされ、^{註三}ホブソン、^{註四}ヒザリントンは隋代と見做し、^{註五}ジュリアン、^{註六}ラウフアーは宋代以降だと述べてゐる。然しこれらの諸説はその出典も示さず、論據いづれも薄弱で、磁州製陶が果していつ起つたかは明らかでない。遺憾ながら私は確實に唐以前と思ふ磁州の遺品に接したことがないが、上田、葉、ホブソン、ヒザリントン氏等の説も一概には否定出來ず、他日これらの諸氏の説を裏書きするやうな資料が發見されないと限らない。

磁州附近は支那大陸でも文化の古くから發達した地方で、北十里の邯鄲には先年原田淑人博士一行の調査された趙の土城址があり、又すぐ南の安陽には有名な殷墟の遺蹟がある。先年故羅振玉氏は磁縣附近で蟻鼻錢、骨貝、眞貝等を發見したこともあり、考古學的にも重視すべき地方とされてゐる。

磁州志沿革の條には

春秋	屬晉
戰國	屬趙
秦	屬邯鄲郡
漢	魏郡武安縣地
曹魏	隸廣平郡
後魏	折武安縣地置
東魏	改屬魏郡
北齊	改隸清都郡
隋	爲臨水置滏陽縣及武安郡爲魏郡開皇十年郡廢隸相州改磁州以滏陽附郭大業初州罷以臨水盜陽屬魏郡
唐	屬相州永泰復置州天祐改惠州
後梁	屬昭義軍節度
宋	潭寧以昭義縣省入改爲滏陽郡以邯鄲縣屬焉旋爲磁州
金	仍爲磁州
元	初陞爲滏陽軍節度屬廣平路復爲磁州
明	洪武改屬彰德府廢滏陽縣置守禦千戶所
清	屬直隸廣平縣
民國	改縣舊屬直隸大名道今屬河北省

とあり、磁州の名の起つたのは隋からであるが、この名稱の起源について^{註五}ジュリアンは次のやうに述べてゐる。

この地は嘗ていろいろの名で呼ばれてゐた。磁州の名の始めて見へるのは隋の開皇年間即ち西曆五百九十年であつて、縣の近郊に磁山といふ山があり、そこから多量に磁石を産した。これが磁州の名の起りであつて、唐代縣の產物としては磁石のほか何もなく、磁州の製陶の起つたのは宋以後のことであ

る。

ラウファーもこの説を引用し、前掲のやうに許之衡も飲流齋説で同じ意見を述べてゐる。

磁縣から磁石を産し、これを朝貢した記録は新唐書・太平寰宇記・宋史などにも散見し、縣西十二里餘の磁石山は磁石の產地として知られてゐる。磁縣の名はこれから起つたもので、磁縣は陶器の產地としてよりは寧ろ磁石の產地として名高かつたところである。今日磁と瓷は同義に解され、一般に瓷器よりは磁器の方が多く用ひられてゐるが、磁の字はもともと磁石を意味し、瓷の意に轉化したのは後世のやうである。古く諸書にはすべて瓷器と書き、磁器は正しくは瓷器と書くべきであらう。

磁州の古窯址と彭城鎮の現窯との中間に、低い鼓山の丘陵が南北に連亘してゐる。これを斷ち割つて滹陽河が流れ、その一角に響堂山があり、その麓に紙坊の部落がある。狭いこの紙坊の地峽部を昔は滏口と呼んでゐたが、滏口は河北の平原から大行山脈を越へて山西に通ずる要衝の地で、歴史上この地の樞要性に就いては顧祖禹の「讀史方輿紀要」^{卷四十九}磁州の條に詳しく説かれてゐる。特に鄴即ち今日の河南省臨漳縣(磁縣の南約七里)に都を鄭め、晉陽即ち山西省太原を別都としてゐた北齊時代は、滏口から壺關を越へて濁漳水を遡り、襄垣から沁水にそつて晉陽に通ずる徑路は、この兩都をつなぐ最捷徑で、當時往來は頗る頻繁だつたやうである。そしてこの通路で最も樞要な地點は滏口で、北齊時代の滏口については水野清一、長廣敏

雄兩氏が著書「響堂山石窟」にいろいろ古文獻を引用して詳述されてゐる。

又磁州の古窯址のある臨水の部落は、ちらほら農家のあるさびれた農村だが、魏の黃初三年この地に臨水縣が設けられて以來、六朝・隋・唐・宋初を通じて縣治のあつたところである。北宋の熙寧六年縣を廢して鎮とし、「金史」地理志にも滹陽縣に屬する臨水鎮として擧げてあるが、昔はこの附近に繁華な街があつたらしく、臨水の名も亦屢々諸書に散見してゐる。

北齊時代この地に響堂寺が建立され、石窟の鑿られたのは故あることであるが、この附近に無盡藏にある陶土と石炭に着目し、製陶の起つたのも亦當然のことであらう。然しそれが果していつであつたかは遺憾ながら徵すべき資料文獻がない。たゞ磁州志沿革の條には隋の大業の初めに「州を罷め、臨水・瓷陽を以て魏郡に屬す」とあり、もし隋代この附近に瓷陽の地名があつたとすれば、或ひは當時既に製陶が行はれてゐたのではないかと想像される。

然し今日發見されてゐる確實な資料は、いづれも北宋以降のもので、一般に磁州窯は宋元以降の窯のやうに思はれてゐる。磁州の陶器でこれに年款のあるものは時々見かけることがあるが、然しそのすべてが信頼出来るわけではなく、坊間偶目するのは寧ろ近年の偽作の方が多いかも知れない。例へば「大宋建隆年製」「大宋熙寧年造」「大宋元豐年製」「大宋元祐年製」「大宋宣和年造」「大宋大觀年製」等、北宋の年款のある磁州の繪高麗、赤繪はその一例で、いづ

れも警戒を必要とする近年の贗物のやうである。

從來發見されてゐる磁州の陶器で、最古の年款のある資料はデヅキッド卿所藏の至和三年の銘のある長方形の陶枕である。長さ六寸一分、粗鬆な灰色の磁胎に全面黒釉がかゝり、胴に型押しで寶相華唐草文を表はし、底

に「至和三年」及び

「張家造」の印が捺してある。私も實見

したわけではないの

で、果して磁州窯で

あるかどうかは斷言

の限りでないが、ホ

ブソンはこれを磁州

窯と見倣してをり、

デヅキッド卿所藏品

の圖錄^{註七}を見ても恐ら

くは磁州窯であらう

と思はれる枕であ

る。

又大英博物館には挿圖第六に示すやうな熙寧四年銘の陶枕がある。同じく長方形で長さ七寸二分、淡灰褐色の器地を白化粧し、これを搔落して側面四方に寶相華文様を彫り、頂面に大きく「家國永

大英博物館藏

第六圖 磁州窯熙寧四年銘陶枕

三〇

安」の四字を線彫りとしてある。餘白は小圈文で埋め、右側に「九大法底趙家枕永記」、左側に「熙寧四年三月十九日晝」の銘文が刻してある。全面に透明性の軟らかい白釉がかゝり、俗に白搔落と呼んでゐる手で、類型の陶枕は相當我國にも將來されてゐるが、これに年款のあるのはこの枕だけのやうである。ホブソンは大英博物館^{註八}案内記にこれを磁州窯としてゐるが、私が磁州古窯址で發見した陶片の中にはこの手はなく、傳へ聞くところによれば河南省清化鎮に近い黨陽峪にこの類の陶片の出土する古窯址が發見されたとも聞いてゐる。この手が果して磁州窯であるかどうかは決定的でないが、從來一般に北宋の磁州窯と見倣されてゐるものである。

北宋の磁州窯を知るのに最も貴重な資料は、鉅鹿出土の遺物及び陶片であらう。周知のやうに鉅鹿は北宋の大觀二年漳河の氾濫のため街全體が埋没した、東洋のボンペイと謂はれてゐる遺蹟で、鉅鹿縣志には

大觀二年秋河決舊堤流行邑中、寺之所存塔與羅漢閣爾、水既東下退淤之地高餘二丈

とある。民國初年偶然この遺蹟が發見されて以來、鉅鹿では盛んに發掘が行はれ、最も盛んだつた民國九・十・十一年頃には、毎日一萬人以上の附近農民が雲集し、發掘に熱狂したといはれてゐる。爾來今猶發掘が続けられてゐるが、鉅鹿からは夥しい數の古器物特に古陶磁器が發見された。鉅鹿出土の古陶磁器のうちその數の壓倒的に多いのは白無地の磁州窯で、俗にこの手を鉅鹿と呼んでゐる。其

他鐵繪文様・白地黒搔落・白搔落・飴釉・柿釉・棟上手・俗にルイ・スン・ツーと呼ばれてゐる軟火緑釉のかゝつたもの等、各種各様の磁州窯と思はれるものが澤山に發見されてゐる。いづれも地下十數尺の深い層位から出土したもので、北宋大觀二年の洪水の時埋没したものであることは疑ひの餘地がない。又民國九年に行はれた天津博物院の發掘に際しては、恐らく磁州窯であらうと思ふ元祐七年銘の柿天目合子、崇寧二年新婿の墨書銘のある白無地の陶枕、大觀二年銘の白無地の洗二點、同じく大觀二年の銘のある柿天目合子等が發見され、鉅鹿出土の遺物が大觀二年以前のものであることを裏書きする貴重な資料とされてゐる。

猶鉅鹿の東東南約二十五里の清河縣も亦略、同時に漳河の氾濫によつて埋没した遺蹟とされてゐるが、鉅鹿について一時清河縣出土の陶器が騒がれたことがある。清河出土の古陶は略、鉅鹿出土のものと同種で、やはり磁州のものが壓倒的に多いが、概して鉅鹿の出土品よりは優秀のやうである。清河は當時鉅鹿よりも富裕な邑だつたらしく、例へば今日我國にある磁州窯の奴壁とされ、外國にもその例を見ない世界的絶品とされてゐる、細川侯爵家所藏の磁州窯白地黒搔落團花文瓶(美術研究第百十二號所載)及び白鶴美術館所藏の磁州窯白地黒搔落飛龍文瓶はともに清河縣出土と傳へられてゐる。又私は北京で清河出土の陶片を百箇ほど見たことがあり、私も十片ほど所藏してゐるが、いづれも實に美事な陶片で、私が鉅鹿で獲た陶片とは比較にならないほど優れてゐる。

この他北宋と思はれる一二の遺蹟からも磁州窯の遺品遺片が相當に發見されてゐるが、これらの資料によつて北宋の磁州窯がどんな器形・文様・釉胎・作風であつたかがわかる。

北宋の磁州は器形嚴正、文様銳峻、釉胎精良で、純正崇高な時代精神をよく反映してゐると同時に、實に潑刺新鮮で、到底幾數百年の星霜を経たものとは思はれない清新さがある。圖版第一〇乃至第一五は北宋と思はれる磁州窯の一例であるが、いづれも簡潔高雅な北宋磁州の作風をよく示してゐる。

圖版第十白地黒搔落牡丹唐草文瓶(高一尺一寸)は、北宋磁州獨特の作風で、灰白色の器地を白化粧し、漆黒の鐵繪具で雄渾な牡丹唐草文を描き、全面に透明性の白釉を施したものである。堂々とした形といひ、嚴しい大柄な彫文様といひ、世界的な絶品として定評あるもので、もとユーモルフオポロス翁が愛藏してゐたが、最近井上恒一氏の有に歸したものである。

圖版第十一白搔落牡丹唐草文瓶(高六寸四分)は、灰白の器地を白化粧し、これを搔落して花菱地に巧麗な牡丹唐草文を刻み、全面に白釉をかけたものである。釉薬は焼成が甘いため稍、失透性を及びてゐるが、纖麗な文様とよく調子して實に溫雅な感じをたゞよわせてゐる。故山田三次郎氏の遺愛品で、嚮に重要美術品に指定されてゐるものである。

圖版第十二白地黒搔落寶相華文枕(幅一尺)は、圖版第十と同一手法だが、簡潔澄明な實に美しい文様で、私はこのごろでこの枕を見

た時ほど驚いたことはない。

圖版第十三(一) 白無地蓋物(高六寸六分)は、灰白色の器地を白化粧し、全面に白釉をかけた、俗に鉅鹿と呼んでゐる白無地の合子である。寸分のすぎがなく、而かもふくよかな大きさがあり、支那歴代の陶磁器のうち、北宋のものが最も形が正しいといふことはこの蓋物を見ても謂へやう。

圖版第十三(二) 黒地白點文壺(高三寸一分)は、灰白の器地を白化粧し、その上に漆黒の鐵繪具を全面に塗り、點々とこれを搔落して飛白文様を表はし、透明性の白釉を全面にかけた、實に近代的な感じのするものである。

圖版第十四(一) 黒釉堆線文双耳壺(高五寸)は、灰白の器地に白泥を盛上げ、胴に平行線文を連ね、その上から全面に黒餉釉をかけたものだが、堆線文の部分だけ釉藥が流下して純白の器地が透けて見える。この手が磁州窯であるといふ確證はまだないが、器形作風特に盛上げの白泥及び器地から、恐らくは北宋の磁州であらうと思ふ壺である。

圖版第十四(二) 鐵繪魚藻文深鉢(胴徑五寸)は、圖版第十、第十二と同一手法だが、形の端正な魚文様の實に生々とした鉢である。

描圖は粗笨だが、明清のものとは自ら違ふ格調があり、明快な磁州窯の特徴をよく示した遺例である。

圖版第十五(一) 白覆輪天目(徑四寸九分)は、如何にも北宋のもののらしい純潔な形と感じの茶碗である。白覆輪天目には定窯のもの

もあるが、遺品としては磁州の方が多く、器地と覆輪の白化粧に北宋磁州の特徴が窺はれる。もと横河民輔博士の愛藏品で、博士が帝室博物館に寄贈されたものの一つである。

圖版第十五(二) 揀上手小鉢(徑四寸二分)は、赤土と白土を揀り合はせて作り、これに透明性の軟らかい白釉を内外全面にかけたものである。俗に揀上げ手、鶉手、木理文等とよび、英語では *marbled ware* と呼んでゐる。唐以來北支で行はれてゐる一つの作風で、故中尾萬三博士はローマ硝子にその起源があると説かれてゐる。私は鉅鹿でこの手の破片を發見したが、清河からも出土してをり、北宋にもこの作風のあつたことは確かだが、たゞこれが果して磁州窯で焼けたかどうかはまだよく解らない。然し從來一般に恐らく磁州窯であらうといはれてゐるが、小倉武之助氏所藏のこの小鉢は高麗古墳から出土したものと傳へられてゐる。高麗時代朝鮮でも揀上手を焼いてゐるが、この小鉢は恐らく支那から將來されたものであらう。

以上は北宋の磁州と見做されてゐるいくつかの例であるが、いづれも簡潔澄明な美しさに輝き、元明以降の磁州のやうな龕架蕪雜なところはなく、冷嚴理智的な時代精神をよく表はしてゐる。

南宋の陶磁器は北宋のものに較べ、概して器形もくづれ、作行も厚く、文様も亂れてゐる。然し遺憾ながら南宋の磁州窯には明確な基準となる資料がまだ發見されないため、それがどう變化してゐるのか知ることが出来ないが、文化中樞の南漸と共にその作風の低調に墮したことは想像に難くない。

宋磁州窯黑搔落寶相華文枕

東京 男爵 岩崎小彌太氏藏

(一) 宋磁州窯白無地蓋物

東京 井上恒一氏藏

(二) 宋磁州窯黑地白點文小壺

帝室博物館藏

(一) 宋磁州窯黑釉白堆線文双耳壺

東京 反町茂作氏藏

(二) 宋磁州窯鉄繪魚藻文深鉢

京都 野田鑒五郎氏藏

藏館物博室帝

碗茶目天輪覆白窯州磁宋 (一)

藏氏助之武倉小 京東

鉢小手上揀宋 (二)

藏氏作茂町反 京東

碗文花草繪赤宋 (一)

藏館物博室帝

皿文繪鉄窯州磁明 (二)

南宋の磁州の貴重な資料とされてゐるのは所謂宋赤繪である。圖版第十六(一)反町茂作氏所藏の碗はその一例であるが、宋赤繪は今日發見されてゐる支那最古の赤繪とされ、古樸明純な親しみのある陶器として頗る珍賞されてゐる。宋赤繪には例へば帝室博物館、神戸徳太郎、木村貞造氏所藏の金泰和元年銘の盃皿、帝室博物館所藏の金正大七年銘の盃のやうに、その製作年代の略々推定出来るものがある。從來發見されてゐるのは金の年款のあるものばかりで、金即ち南宋の遺品とされてゐる。たゞこれが果して磁州窯で焼けたかどうかは勿論明らかな記録もなく、遺蹟遺物の上からも實證出来ない。一つに今後の研究調査に俟たねばならないが、釉胎・器形・作風から、恐らく磁州窯であらうといはれてゐる。

元の陶磁器は漢文化一般の凋落に伴ひ、その作風が著しく匱策粗雑となつてゐるが、元の磁州窯と見做すべき遺品に大英博物館所藏の八思巴^パ文字のある酒瓶がある。俗に笹耳の徳利と呼んでゐる胴の長い頸に笹葉形の耳が四つ附いてゐる徳利で、胴下半身には失透性の黒鉛釉をかけ、上半白地に鐵繪具で八思巴文字があり、ペリオ博士の説によれば Sayi darasun 「うまい酒」の意味ださうである。

八思巴文字は元の帝師八思巴が西藏文字を工夫改削して制定した新文字で、世祖は至元六年二月詔してこれを天下に公布し、爾來官邊の記録文書には正文としてこれが用ひられたといはれてゐる。従つて八思巴文字のあるこの徳利は元と見做すべき珍らしい資料で、八思巴文字のある陶器は龍泉の青磁、景德鎮の染付、色繪等に幾點か

あるが、磁州の繪高麗はこの徳利だけのやうである。類型の徳利は時々見かけることがあるが、どれも分厚い粗笨なもので、元代磁州窯の作風を窺ふことが出来る。

蒙古ドロンノールの西北約九里に元の上都址があり、昭和十二年夏、原田淑人博士を首班とする東亞考古學會の一行がこの遺蹟を發掘調査したが、採集した遺片のうちに繪高麗の陶片がある。又内蒙古の百靈廟は元の汪古特族の本據とされてゐるが、昭和十五年江上波夫氏がこの地で採集した遺片に、略々同種の繪高麗の陶片がある。ともに直ちに磁州窯とは見做し難いが、元の磁州窯を想定する一つの資料とはなるものであらう。

猶帝室博物館には元の至元六年銘の三彩の小皿がある。唐三彩、宋三彩、遼三彩等の流れをくむ綠黃褐の三彩でいんどつた小皿で、見込に兔と草葉文を線刻りとし、裏面高臺脇に

至元六年□金僧只願堅珠得之賢□金玉需之

の墨書銘がある。どこの窯のものとはつきりとしなが、灰白色の堅い器地を見ると恐らくは磁州ではないかと思ふものである。

明代磁州窯の資料としては、挿圖第七大英博物館所藏の正統十一年銘の壺と、所藏者不明だが、一九一七年ロンドンで開かれた北京故宮舊藏品の賣立目録^{註九}にある萬曆二十七年中夏銘の壺とがある。又清初の資料としては中尾萬三博士遺愛の乾隆十三年銘の植木鉢があり、この他年款はないが、明清と見做すべき遺品に時々接することがある。いづれも灰白の器地を白化粧し、その上に粗笨な鐵繪文様

をかきなくつた所謂繪高麗で、形も文様も宋のものゝやうな簡潔緊密なところはなく、それこそ磁州志にいふ「質厚而匱只可供肆店莊農之用」といつたもので、その作風の著しく多量製産化し、粗雑化したことが感ぜられる。

以上磁州陶業史の基準となるいくつかの資料を列挙したが、この

第七圖 磁州窯正統十一年銘壺 大英博物館藏

僅かの資料で磁州陶器の沿革を論斷することは勿論不可能である。然しこれによつても磁州で最も優れたものが焼け、その作風の純潔高雅だったのは北宋時代で、南宋以降はその作風が亂れ、支那陶磁史全般の動向とその軌を一にしてゐることが窺はれる。

然し磁州窯は例へば景德鎮窯や吉州窯のやうに、唐宋時代には白磁を焼き、元を境にして明以降は染付赤繪を焼くといつた著しい變

化はなく、その作風には一貫した一つの型がある。一貫した一つの型とは灰白の器地を白化粧し、これに簡素な鐵繪文様を施した所謂繪高麗だが、繪高麗は元明のものは勿論、最近のものでも一見宋磁と區別のつかないものがある。世上繪高麗さへ見れば宋磁宋磁と呼ぶ聲をよく聴くが、新しいものでもどこことなく古格があり、調子の高いところがあるのは、今猶磁州窯が宋元以來の古い傳統を堅く保持してゐるためであらう。

又繪高麗にはどこか西方的な異國的感觉がある。例へば小亞細亞、歐羅巴方面の上代土器と共通する器形・文様・手法・感覺のものがあるのは、もともとこれを生んだ文化的背景にイラン文化の影響が著しく浸潤してゐるためであらう。周知のやうに北支は絶えず北方異民族の侵略をうけ、西方文化の影響が著しい。従つて中南支の文化文物の民族的東洋的なのに對し、北支には國際的西方的な色彩が強く、この傾向は自ら器皿の端々にまで表はれずにはゐない。我々が漢六朝の越州の青磁、唐宋の景德鎮の白磁、宋元の龍泉の青磁、明清の染付等、中南支の磁器を見る時には何か東洋的な、支那的なものを感じるが、これに反し、北支で焼けたものは漢の綠釉にしても、唐の三彩にしても、宋元以降の繪高麗にしても何か西方的なものを感ずるのはこのためであらう。そして北支の陶器のもつ異國的な明朗闊達なこの特徴を最もよく表はしてゐるのは繪高麗で、また繪高麗ほどひろく北支各地に流布してゐる作風はあるまい。

繪高麗風の陶器が北支のどこどこで焼けたか。又現在どこどこで

焼いてゐるか。繪高麗といふ言葉の語源語義、我國に將來されてゐるその代表的遺品等について猶書きたいこともあるが、この小篇は雑薄ながら磁州窯の概括的展望を述べるのにとり、更に詳しいことは他日の機會に譲ることゝしたい。

註一 葉麟趾著「古今中外陶瓷彙編」

註二 上田恭輔著「支那陶磁繪高麗」(旬雅集第三)

註三 Hobson: Chinese Pottery and Porcelain. Vol. I T'zu chou yao

註四 Heatherington: The Early Ceramic Wares of China. T'zu chou.

註五 Julien: Histoire et Fabrication de la Porcelaine Chinoise.

註六 Lauter: The Beginnings of Chinese Porcelain.

註七 Hobson: A Catalogue of Chinese Pottery and Porcelain in the Collection of Sir Percival David.

註八 Hobson: Guide to the Pottery and Porcelain in the Far East. British Museum

註九 Sale Catalogue of Oriental Art Treasures from The Chinese Imperial Palace. 1917.